續史籍集覽

語學自在

下

69
50
14
東京圖書館
門 類 函 架 號 冊
六 九 ○ 九

語學自在卷之二

權田直助 編述

語格

語格は、年歳を重ねて、あらざれば、學び難かるべし。これを學ぶに順序あり。第一には、體言用言助辭を、復暗誦す。第二には、本圖を、附註、並び圖解に見合せて、其の用法を學ぶ。第三には、語格略習、第四には、語格習法、第五には、短歌、語格、第六には、長歌、語格、第七には、文章語格といふ樣に、次々に學ぶべし。但、童兒輩には、此の道に長たる人教導くにあらざれば、得べからず

本圖に載れる言辭を暗記にし、圖面を明にし、其の用法を知るは、此の道の

案内者を得るものにして、其の業進む事速に、暗記に疎く圖面不分明からむ
ハ、案内者を得ざるものにて、惑しき限多くて進む事難かるべし。よく勤學ふべ
きふり

語格略習ハ、誰もく耳馴れたる、古歌古文を摘出でゝ、先、體言、用言、助辭
の三種を分ちて、符箋を附くべし

古今春上　年の内に春ハ来にけり一とせをこぞとやいはむことしとやいはむ在原

元方　同春下　春霞たなびく山のさくら花うつろハむとや色かハりゆくよみ人しらず

後撰春上　春立つと聞きつるからに春日山きえあへぬ雪の花と見やらむ凡河内躬恒

同中　うゐし時花見むとしも思ハぬにさきちる見れば老いにけり藤原

原長幹朝臣　同下　鶯のふくくふる聲ハむかしにて我が身ひとつのあらずもあるか

ふ藤原顕忠朝臣　拾遺春　春たつといふばかりにやみよし野の山もかすみてけさはみやらむ壬生忠岑　同　春霞たてるを見ればあら玉のとしハ山よりこゆる

ふりけり紀文幹

古今集序　やまと歌はひとの心をたねとしてよろづのことのはとぞなれりける

世の中にある人ことわざしげきものなれば心におもふことを見るものきくものに

つけていひいだせるふり花になくうぐひす水にすむかはづのこゑをきけばいづれか

うたをよまざりける　ちからをもいれずしてあめつちをうごかしめにみえぬおにかみ

をもあハれとおもはせをここなみなの中をもやハらげたけきものゝふの心をもふぐさ
むるはうたふり

此は、歌も文も、今少、増加へて習ハ先むるも宜しからむか。歌ハ、三代集、文は、竹取物語、伊勢物語の内にて、撰取るべし

此の法は、專少童の爲に設く、心ふきものを道引かむには、斯在る容易き所より爲ざれば入立ち難し。これよく學得たらむうへに、次條に就きて學ばしむべし。成人ハ、此の條は、略くも難げふかるべし

語格習法は、豫ねて、讀み覺えたる語彙を、用言六種の活にあてゝ、斯在る詞の類ハ、何の活、然在る詞の類ハ、何の活といふことを意得おくべし。然あらむには、古歌古文の詞、大方ハ、何の活といふ事ハ覺られぬべし。然あれども、初學の徒は、ふほ、不分明しくて、慈ふらむも知るべからず。是故に、今亦、微細しく其の法を

示すべし。そは先、眞澄ノ鏡と、經緯ノ圖とを傍に備置き、古歌古文に當てゝ、其の用法を試むべし。其の樣、先ヅ、古今集に、袖ひぢて、むすびし水の、こほれるを、春立つけふの、風やとくらむ」といふ歌につけていはむ。そハ、袖は、形あるものふれば、有形體言ふる事を知りて、其の符餐を刺し、ひぢは、如何ふる詞ぞといふに、下音ちなれば、多行タチツに活く詞ふる事を知り、さて、經緯ノ圖の四段の活、多行打たウウツウてとあるに當てゝ、喚び試みてひたひぢひづひでと活く詞にて、ひぢハ、即、其の連用言ふる事を知りて、又、其の符餐をさし、ては、上にいへる、體用てにの辨に從ひて、雜のてにて、連用言ふる事を知り、むすびハ、下ノ音びふれば波行ハヒフヘホに活く詞なる事を知り、これを、四段の活、波行に、逢はアひアふアへとあるに當てゝ、喚び試みて、むすばムむすびムむすぶムむすべと活く詞にて、むすびハ、即、其の連用言ふる事を知り、さハ、むすびの連用言より續きたれば、連用言

の段の受けの辭の内に楽むれば、来の類のけきしかと活く辭ありて、即、其の中の連體の志にて、體言へ續く辭ふる事を知り、水は、形あるものふれば、有形體言なる事を、のハ、水といふ體言より續きたれば、體言の受け辭の中に楽むるに、雜の辭に、連用ののと、連體ののと、二つあり。こハ、何とかといふに、次のことほれるといふ、用言へ續けるをもて、連用ののなる事を知り、こほれるは、下ノ音に、れるとあれば、圖解、及、上にもいへる如く、四段の活き詞の、第四音、けせてへめれのれより、良行四段の活の一格の、有りへ轉りて、再、らりるれと活く詞にあてゝ、喚び試みて、こほれらゝこほれりこほれるこほれゝと活きて、其の連體言ふる事を知り、をは、こほれるといふ連體言より續きたれば、其の段の受け辭の内に楽むれば、雜の辭の中に、をあり。それ連用言ふるをもて、用言へ續く辭ふる事を知る。然るに、其の次に、用言ふらずして、春といふ體言ありて、續く事を得ず。これ、上にいへる、語

を隔てゝ、下の用言へつゞく格のをなる事を知る。春ハ形無きものなれば、無形體言ふる事を知り、立つハ、下ノ音つふれば、多行に活く詞ふる事を知り。また、打たゝウちゥつゥてにあてゝ、喚び試みて、立たゝたちたつたてと活きて、其の連體言にて、次の、けふといふ體言へ續く詞ふる事を知り、けふは、これも名ありて形無きものふれば、無形體言なる事を知り、のは、次の、風といふ體言へ續けるをもて、體言の受け辭の、雜の、連體ののふる事を知り、風は、これも形無きものなれば、無形體言ふる事を知り、やは、風の體言より續きたれば、體言の受け辭の中に楽むれば、疑のやあり。これ連用にて、次の、とくといふ用言へつゞく辭ふる事を知り、とくは、下ノ音くなれば、加行に活く詞と知り、四段の活、加行、飽くと同じく、とかゝと、きとくとけと活く、其の截斷言と知り、とくい、截斷、連體二段に亘る詞なれど、その順のまゝに當て行くと法とし、又連體とし てい、下のらむの辭へつゝらむハ、截斷言より續ければ、同段の受け辭の中に楽むれかざるをもて、截斷と定む

はゝらむあり。これ、截斷連體二段に亘れる中に疑のやの係辭あれば、連體方のと知るべし。さて、如此考定めたるうへに、やハ係り辭と知り、をハ、隔り續きとして、ひとつゝゝに、符箋を刺せば、

袖ひぢてむすびし水のこほれるを春立つけふの風やとくらむ

此の如くなれるなり。さて又、文章ハ、伊勢物語初段

「昔、男アリケリ。うひかうぶりして、ならの京かすがの里にしるよしして、かりにいきけり。その里に、いとなまめいたる女はらからすみけり。此の男、かいまみてけり。こゝに、片假名にて書ける四もじは、原本脱せりと見ゆれば、補ひたるなり」とある文につきて、其の格を習はむにハ昔ハ、無形體言、男ハ、有形體、アリは、良行四段の活一格の、有りの連用、ケリハ、連用言の受け辭の中の、來の下有りの類にて、截斷辭なり。うひかうぶりは、初と、冠との合體言、しハ、爲のさしすせと活く方の、連用のしなり。てハ、連用言の受け辭の、雜のてにて、連用辭なり。されば、下の語、用言ならむには、直に續くべきを、ならの京といふ體言なれば、直に續く事を得ず、語を隔てゝ、下の用言へ續く。ならの京、かすがの里と、共に有形體言なるよしは知行のよし合體言、してハ、體言の受け辭の中なる、雜の連用辭なり。されど、下の語、用言にあらざれば、なほ隔りて、下の用言へつゞく。かりは、良行四段の活き詞なれども、居りて轉用體言となれるなり。これハ、上にもいへる如く、にと受けたるをもて知るべし。にハ、體言の受け辭の、雜のにゝて、連用辭なり。いきハ、加行の活詞にて、いかゝいきいくいけと活く、其の連用言なり、けりハ、上のけりに同じく、有りの類の截斷辭にて、上のにを係りとして、其の結びとなれり。」そのハ、屬體辭、里ハ、有形體言、にハ、雜の連用辭にて、語を隔てゝ下へ續く。いとは、屬體辭、なまめきは、下、音きなれば、加行の詞に

て、なまめかんふまめきふまめくふまめけど、四段に活く、其の連用言、たるは、連用言の、受け辭の内に來むるに、有りの類の、たらたりたるたれと活く辭の、連體辭にて、下の女といふ體言へつゞく。女と、はらからとは、共に、有形體言、すみは、下ノ音みふれば、麻行の詞にて、すまんすみすむすめと四段に活く、其の連用言ふり。けりハ、上のけりと同じく、にの結びとなりて、截斷るゝふり。」此のハ屬體辭、男ハ、有形體言なり。かいまみハ、下ノ音みふれば、麻行の活詞ふるに論ひふけれども、四段の活きか、二段の活きかといふに、先、本ノ圖を、順の隨に、四段の麻行にあてゝ、喚び試むるに、かいまゝかいまみかいまむかいまめどふれゝど、かいまゝとはいふべくもあらざれば、これに非ず。次に、上一段かといふに、一段の活ハ、一音にるれの二音加りて、活く詞なれば、かいまみのみい見にて、一段の詞なれども、上に、かいまの三音加りたれば、其の活き變るなり これに非ず。次ぎの、上二段麻行の、恨みうらむうらむる うらむれといふにあてゝ、喚び試むるに、か

いまみかいまむかいまむるかいまむれとふる。これよく當れば、これと定め、かいまみは、其の連用言なりとす。將然言のかいまみとするときは、受け辭に、てなくして、かいまみてといいれざれば、あらずとす ては、上にいへる如く、來の下の、有りの類のけりへ續きたれば、竟の連用のてとす。けりは、上に同じ。但、係辭ふくて、自然截れて結はれり。さて、如此して、符箋をさして、習ひ行けば、其の格、左の如く成れり

昔男アリケリ（ラ四 月斤）うひかうふりして（サ四 交）ふらの京（カ 交）すがの里に（ナ 交）行るよし（ラ 交）聞て（カ 交）かりに、いきけり（カ 交 月斤）その里にいとなまめいたる女はらからすみけり（マ 交 月斤）此の男かいまみて（マ 上二 立 月斤）けり

抑、此の道を學ばむとするものハ、此の法をよく心に入れ、本ノ圖の活用しかたを得たらましかば、文にまれ。歌にまれ。師を待たずして、其の格を、正しく明かに

習得られふまし。然ハあれども、初めて、此の道に入立ちたらむものハ、上のかいまみと云ふ詞の如く、其の詞の、何の行、何段の活きにかと、定め難くて、思惱み、心を痛むること有りげふれば、猶、其の探ねかた、定めかたを示すべし。そハ先、上にもいへる如く、其の詞の、下ノ音によりて、ゆきゆくハ加行、「かへりかへるハ良行、」うれしびよろこびハ波行、「いたむかふしむハ麻行、」又、第三音うくすつぬふむゆるうに、るれの音のそはりたる詞ハ、るれの音をば除けおきて、すぐるすぐれハ、加行、「はづるはづれハ、多行、」そふるそかれハ波行といふ樣に定むべし。さて後、何段の活きといふことを考定むべし。譬へば、こゝにうめくといふ詞あり。下ノ音くふれば、加行なること疑ふし。さて、何段の活きふりやといふに、先、本ノ圖の順のまにゝゝ、四段の活に當てゝ、喚び試むるに、うめかうめきうめくうめけとなりて、難ぐる所ふければ、四段の活き詞と定むべし。又、くつおといふ詞あり。多行の詞ふること論

ひふし。これを、定りの如く、四段の活の多行に當てゝ試むるに、くたくちくつくてとふれど、くたくてなといふべきにあらざれば、これには非ずとし、上一段ハ、上にいへる如くなれば措きて、次の上二段の活に當てゝ試むれば、くちくつくつるくつれとふりて平穩ふれば、こゝの詞と定むべし。又、いましむといふ詞あり。麻行の詞ふる事論ひふし。これを、四段の活に試むれば、いましま、いましみいましむいましめとなる。いましま、いましみふとたえて、言ふべきにあらざれば、あらずとし、上二段の活に試むれば、いましみいましむいましむるいましむれとふる。いましみといふべきに非れば、あらずとし、下二段の活に試むるに、いましめいましむいましむいましむるいましむれとふる。これよろしとして、これに定むべきなり。さて又、こゝに、ひろしといふ詞あり。上の詞どもによりて、下ノ音に索めて、佐行として、これを四段の活、佐行に當てゝ試むれば、ひろさ、ひろしひろすひろせとふる。ひろ

すひろせふぐ言ふべきにあらざれば、非じとし、上二段に試むれば、ひろしひろすひろするひろすれとふる。ひろすひろするふぐ言ふべきにあらず。又、これを下二段に試むれば、ひろせひろすひろするひろすれとふる。これもあらじとし、又、これを、久志幾の活にあて〻試むるに、ひろくひろしひろきひろけれとふりて、穂當ふれば、こゝの詞とす。又、あたらしきといふ詞あり。下ノ音によりて加行として四段に試むれば、あたらしかあたらしけふといふ詞出で來、上二段に試むれば、あたらしくるあたらしくれ、又下二段も同じくて、共に、然いふべきに非ず。又、これを、久志幾の活に當て〻喚び試むるに、あたらしくあたらしあたらしきあたらしけれとふりて、始めて、穩當に言ハれて、ここの活き詞ふる事知らるゝふり。そもゝ、此の事、如此くだゝしく言ふハ、實事に試むるに、往々ここに苦しむ徒のあればふりけり。さて、如此言へば、甚難しき如くふれども、こは、文に書ける故にて、本圖

に當てゝ、所作にて爲むハ、意外に容易きものふり。」さて、辭を探ぬる法は、既にいへる如く。體言より受けたるは、體言の受け辭に就きて探ね、將然言より續けるハ、將然言の受け辭の中に索め、連用言よりつゞきたるは、連用言の受け辭の中に得べし。截斷言、連體言、已然言より受けたるも同じかし。凡、語格を學ばむには、最先に、此の法をよく學びて、上に言へる事どもを本ッ圖にあて〻、何遍もくゝも繰返し、又、語彙中の詞、あるハ、他の詞ふりとも、取出でゝ試みつゝ、熟知らむ事を勤むべし。此の道を得業る事の遲速きハ、此の法の、明なると不明るとに有りと意得べし

短歌語格を學ばむには、先左方に擧げたる古歌の符簽を、上法語格習法に隨ひて、一ッくゝに、本ッ圖に當てゝ、此は斯在り。彼は然在りと考試むべし。然しつゝ、凡、十首ばかりも學びたらむには、大方の習法を會得べし。然、會得たらむには、左方

の歌を、一二首抄出して。本書を離れて。自身知れらむ限りを極め盡して、其の格を考へて一〳〵に符箋を刺し、さてそれを、師に正しを乞ふ意得をもて、本書に比校せて、其の當るか否らざるかを考へ試み、其の誤れらむをば、其の誤れる所由を考へ、其の違へらむをば、其の違へる原由を曲にたづねて、本圖に當て、慥に知得て、其の訂正を加ふべし。これひごり學びの法にして、親しく師前に問ひて、是を知るに少も異ふる事無かるべきなり

古今春上　春たてば花とや見らむ雪のかゝれる枝に鶯のなく　素性法師

同　春のきる霞の衣ぬきをうすみ山風にこそみだるべらなれ　在原行平朝臣

同　あさみどり糸よりかけて白玉にもぬける春の柳か　僧正遍

昭後撰春上　水のおもにあやふきみだる春風や池のこほりをけふはとく

同　青やぎの糸よりはへておるはたをいづれの山の鶯かきる　伊勢

拾遺春　櫻ちる木の下風はさむからでそらにしられぬ雪ぞふりける　貫之

同　つねよりものごけかりつる春なれどけふのくるゝはあかずぞありける　みつね

古今夏　さつきまつはなたちばなの香をかげばむかしの人の袖のかをする　よみ人しらず

同　ほとゝきすなくこゑきけば別れにしふるさとさへぞこひしかりける　同

後撰夏　夏の夜にこひしき人のかをとめばはなたちばなぞ忘るべきふりける　よみ人しらず

同　つゝめどもかくれぬものはなつむしらむ　同

の身よりあまれるおもひふりけり　同

拾遺夏

ふつにこそさきかゝりけれ　ふ

ちのはふ松にこゝのみもおもひけるかふ　たげもき　同

うの花をちりにし

梅にまがへてや夏のかきりにうぐひすのふく　平公誠

古今秋上

秋たち

ていく日もあらねどこゝのねぬるあさけの風はたもとすゞしも　安貴子　同

秋きぬと眼にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる　藤原敏行朝臣

後撰秋

秋風のふき志く松は山ながらふみたちかへる音ぞきこゆる　よみ人しらず

同

いつとても月見ぬ秋はなきものをわきてこよひのめづらしきかな　藤原まさたゞ

拾遺秋

秋の夜に雨ときこえてふるものは風に志たがふもみぢふりけり　つらもき

同

くれてゆく秋のかたみにおくものハ我がもとゆひの霜にぞありける　平兼盛

古今冬

みよしの〻山の志ら雪つもるらし　ふるさとさむくなりまさるふり　是則

同

雪ふりて年のくれぬる時にこそつひにもみぢぬ松も見えけれ　よみ人志らず

後撰冬

はつ志ぐれふるほどもなくさほ山のこずゑあまねくうつろひにけり

よみ人志らず

同

くろかみの志ろくふりゆく身にしあれはまづ初雪を

あはれとぞ見る　同

拾遺冬

霜おかぬ袖だにさゆる冬の夜にかものうハげを思ひこそやれ　右衛門督公任

同

あたらしき春さへ近くふりゆけばふりのみまさる年の雪かな　よしのぶ

古今戀一

行く水にかずかくよ

りもはかなきハ思ハぬ人をおもふ　ふりけり　よみ人しらず　同二　うたゝねに戀し
き人を見てしより夢てふものハ頼みそめてき　小野小町　後撰戀五
人忘れず物おもふ頃のわが袖は秋の草葉におくらざりけり　さたかずのみこ
同六　うき世とハ思ふ物からあまのゝとのあくるはつらきものにぞありける　よ
み人しらず　拾遺戀一　時雨にもあめにもあらで君こふる年のふるにぞ
袖はぬれける　よみ人しらず　同二　あひみてはいくひさゝにもあらねど
も年月のごとおもほゆるかな　人まろ
かですぐしゝむかしふるらむ　藤原實方朝臣
時のまも心はそらにふるものを

留りより上へかへる格

古今春上　うぐひすの笠にぬふてふ梅の花をりてかざらむ　老いかくるやと
東三條の左のおほいまうち君　同　たれしかもとめてをりつる　春霞たちかく
すらむ山のさくらを　つらゆき　同下　さくら花ちらばちらなむちらずとてふ
る里人の來ても見ずくに　これたかのみこ　同戀一　夕ぐれは雲のはた
てに物ぞ思ふ　あまつ空ふる人をこふとて　よみ人しらず　同二　おろかなるふみ
だぞ袖に玉ハなす　我はせきあへず　たぎつせふれば　こまち　同五　うきふがら
けぬる沫ともふりふむ　流れてさだに頼まれぬ身は　ものり　後撰戀一

あだにこそ ちる『さ見るらめ』君にみふつろひにたる花の心を よみ人しらず

古今夏 ほとゝぎすはつ聲きけば あぢきなく ぬし定らぬ戀 せらる『はた』素性

同戀三 戀しくハ志たにを思へ『むらさきのねずりの衣』いろにいづな『めめ』

よみ人しらず 後撰戀三 そら志らぬ雨にもぬるゝ我が身かな『みかさの山を』

よそにきゝつゝ 眞忠がもとの女 古今戀五 吹きまよふ野風をさむみ秋

萩の『うつりもゆくか』人の心の 雲林院のみこ 拾遺雜賀 かくれみのかく

れ笠 なもえてしかな『來たり』さ人に志られざるべく 平公誠 古今春上

石ばしる たきなくもがな『さくら花手折りてもこむ』見ぬ人のため よみ

人しらず 同戀四 さむしろに衣かたしきこよひもや『を』待つらむ『宇

治の橋姫ハ』同 拾遺雜戀 わがせこをこゝふるもくるし『いとまあらばひろ

ひてゆかむ』戀わすれ貝ヲ」坂上郎女 金葉戀上 よゝもに玉ちるごこのす

がまくら『見せばや』『人に』よゝのけしきを」源俊頼朝臣 この歌、後のうたながら、二段に返へるゝ、いとめづらしければ出す。この格、外にもある事なれど、こゝにいいださず

此の格ハ、すべて、連用言にて、よみつめたる歌ごもに限れるなり。たまゝ體言にて、よみつめたるもあれども、それハた、連用の辭を含めるものなり。それ、こゝに、片假名して加へたる辭どもを見て知るべし。凡、連用言ハ、既にも辨へたるが如く、用言へ連く格の詞ふる故に、そこにて切るゝ事ふし。切るゝ事無き故に上へ返るか、下に意を含めるか

の、二格とふるふり。さて、上へ返るは、一首のよみ成しによりて、一二三四五、何とのの句へも返り、又、一句の中にても、返るとへある事、こゝの歌どもの如し。一句中にて返る歌ども、この外にも「見出たりや□君」「思ふな□わがせ」「いけらじや□世に」などなほこれかれあるべし。然して、其の結ばる所は、皆、截斷言ふこと、こゝの符簽を見て知るべし。さて、下に意を含めたる格は、別けて下に擧ぐべし

意のうらへかへる格

古今春上、

けふこずばあすは雪とぞふりまし　きえずは　あり　とも

花と見ましやなりひら朝臣　同秋下

うゑしうゑば秋なき時やさかざらむ

花こそちらめ根さへかれめや　同　同戀一

秋の田のほのうへをてらすいなづ

まのひかりのまにも我や忘るゝ　みへしらず　同雜下

わすれては

夢か　こそ思ふ　おもひきや雪ふみわけて君を見む　とは　なりひら朝臣

後撰戀二

ふにはがたかりつむあしのあしづゝのひとへも君を我やへだつる

兼輔朝臣　同哀傷

ちろともにおきぬし秋の露ばかりかゝらむものとおもは

ひかけ　きや　玄上朝臣女　古今春上

春の夜のやみはあやなし梅の花

色こそ見えれ香やはかくるゝみつね　同下

「吹く風をなにとて恨みよ鶯は」

我やはな花に手だにふれたるよみ人しらず　同戀四

底ひなき淵やはさわぐ

山川の淺き瀬にこそあだ波はたて素性法師　後撰戀三

わすれふむを思ふ心のやすからぬつれなき人をうらみまし　よみ人しらず　古今雑上

老いぬるとてふごか我が身をせめきけむおいぬばけふにあハましものかとし　アフヿハナラヌ

もきの朝臣　拾遺哀傷

うきよをばそむかばけふもそむきふむ明日もあり　うきよ

頼むべき身か廢滅保胤　古今春下

聲たえずふけや春のうぐひすひとこゑにふたゝびこだにくべき春かハおき風　同

けふのみと春を思ハぬ時だにもたつこゝろやすき花の蔭かハみつね　後撰戀六

小山田の水ふらなくにかくばかり流れそめてはたえむものかハ　右大臣

こは、一首の意をよく味ひて、其のうらへかへる語を加ふべし。初學の徒、もし、其の語を考ひ得ざる時ハ、先、この　符簽のみ施けおきて、後、おもひ得たらむときに、加ふべきなり

意のうらへ反る辭の如くして反らざる格

古今雑下　世の中はむかしよりやハうかりけむ我が身ひとつのためにふれるか

よみ人しらず

夏

はちす葉のにごりに染まぬ心もて何かは露を玉とあざむく

同雑下　いかゞらむいはほの中にすまばかは世のうき事のきこ

僧正遍昭

えことばらむ〻よみ人しらず

これも、一首の意をよく味ひて、上のやハかハと異りて、其の意の、うらへ反らざることを知るべし。初學の徒、もし、よく考得ざるときハ、其の符箋をばさしおきて、後、よく考得たらむとき、施すべし

くさぐさのいひかけの格

古今春上　霞たちこのめもはるの雪ふれば花なき里も花ぞ散りける〻　貫之

同戀一　音にのみきくの白露よるはおきてひるはおもひにあへずけぬらもさ

べし　素性法師　同三　こひ〻〻てまれに今宵ぞあふ坂のゆふつけ鳥ハ鳴かず

もあらなむ〻よみ人しらず　後撰戀一　こひをのみ常にするかの山ふれば

にのねにのみふかぬ日はふし〻よみ人しらず　同二　かゝりける人の心を志ら

露のおけるものとも〻たのみけるかふ〻藤原敦忠朝臣　拾遺戀一　あふ事ハか

たゞりするみごり子のたゞむ月にもあハじ〻とやする〻兼盛　同雜下　わが

事ハえもいハしろのむすび松千とせをふ〻ごもたれかとくべき〻それのよしたゞ

此の格ハ、一首の志たてと、係り結びのうちあひとをかむがへ合せて、いひかけたる詞の、必、かくあるべしといふことを思定めて、含語を加ふべきなり

含み詞

係辭のかを隱して含めたる格

古今春上　春日野のとぶひの野守出でゝ見よ〻いまいく日ありてゝ若菜つみ

てむ　よみ人しらず　同　くるさとあくさとめかれぬものを梅の花いつのひと間にうつろひぬらむ　貫之　同夏　さみだれにものの思ひをれば時鳥夜深くふきていづちゆくらむ　紀友則　同秋上　秋風にはつ雁がねぞ聞ゆなる　誰　同秋上　玉章をかけて来つらむ　同　同冬　雪ふれば木ごとに花ぞさきにける　いづれを梅とわきてをらまし　同

此の歌どもは、普通に、何の類いなに、なぞ、いづれ、いつ、たれ、たが　を係りとして、連體言くすつふむるにて結べるものとす。こは、首めにいへる如く、何の類は、係辭にあらず、その下に含める疑の か、即、係辭にて、其の格もて結べるなり。これも一首のよみふしを味ひて、かもじの含める所を考定むべきなり。又かゝるときに、のがそこそふぐこ含めて略けるも稀々あり。准へて知るべし。

ぞやこそその結び詞を隠して含めたる格

古今戀四　つの國のなにはの思はず山城のこだちにあひ見むことをのみこそよそへしらず

拾遺戀一　さはにのみ年はふれども あしたづの心は雲のうへにのみこそ　九條左大臣

古今春上　谷風にとくるこほりのひまごとにうち出づる浪や春の初花　源さね澄

伊勢物語十六　これやこの天の羽衣　うべしこそ君がみけしにたてまつりけれ　紀有常

古今雜　大方は月をもめでじ　これぞ　このつもれば人の老いとなるものなり平の朝臣

後撰戀四　ひたぶるに思ひ

ふわびそ／ふるさとる人の心はそれそよのつね　贈太政大臣

これハ、一首の意と、係辭とを考合せて、其の含める結び辭を定むべし

くさ〳〵の結び辭を隱して含めたる格

古今冬　朝ぼらけあり明けの月と見るまでによし野の里にふれる白雪／坂上

これのり　同賀　我が君は千世に八千世にさざれ石のいはほとなりて苔の

むすまで／よみ人しらず　同戀二　思ひつゝぬればや人の見えつらむ／夢と知りせばさめざらましを／小野小町　後撰戀二　おく露のかゝるものとは思へど

もかれぬものはなでしこの花／よみ人しらず　拾遺戀九　さにかくに物

思はずひだゝみうつすみふのたゝい／一すぢに／人まろ

これも同じ心得ふり

結び詞を含めてと、受くる格

古今秋上　いつは／とい時はわかれど秋の夜ぞ／もの思ふことの限りふりける／よみ人しらず　同戀四　今は／とてかへす言の葉ひろひおきておのが物からか／たみとや見む／近衛院右おほいまうち君　後撰春上　いづこ／さも春の光りは／わかふくに／まだみよし野の山は雪ふる／みつね　同戀一　くや／くやまつ／夕ぐれと今は／とてかへるあしたこいづれまされる／元良のみこ　拾遺哀傷

世の中にあらましかば と思ふ人ふきが多くもふりにけるかな 藤原爲頼

この上ハ、體言か、截斷言か、あるハ、ぞやかこそ等の結辭ふるべきを、さもあらぬは、必、含み語ありと意得べし

語を結べる下に語を含めてのいへる格

古今戀四

君やこむ 我やもかむ のいざよひにまきの板戸もさいずねにけり よみ人しらず

後撰戀六

夕されば思ひぞ志げき まつ人のこむやこじやのさだめふければ 同

萬葉十二

丹波路の大江の山のさねかづらたえむの心我が思はなくに

こハ、上の語ハ結ばりて、截斷るゝ辭の下に限れる事にて、いとまれふる格ふり如くの意を含めるの

古今戀一

よしの川いは浪たかく行く水のはやくぞ人を思ひそめてし

紀貫之

同

夕づくよさすや岡べの松の葉のいつともわかぬ戀もするかな

ふ よみ人しらず

同五

世の中の人のこころハ花ぞめのうつろひやすき色にぞ

ありける よみ人しらず

同

あしべより雲ゐをさして行く雁のいや遠ざかる我が身かふしも 同

拾遺戀二

忘のびつゝ思へばくるし 住のえの松の根ふかからあらハれなはや 同

これらも、其の歌どもの意を明にし、含語のあるべき所を考定めて加ふべし

枕詞をおける格

古今春上　春日野はけふ（カ四通）はやきそ（ラ四通）わか草のつまもこもれり（ラ四上）われもこもれ（六通）

り（ラ四通）よみ人しらず　同下　梓弓春の山べをこえくれば道もさりあへず花そ（ハ下二寄）

ちりける（ラ四通）つらゆき　同夏　いそのかみふるき都のほとゝぎす聲ばかりこそむか

しふりけれ（月通）素性　同秋下　ゆふづく夜をぐらの山に鳴く鹿のこゑのうち

にや秋はくるらむ（ラ下二通）つらゆき　同冬　ふる雪はかつぞけぬらし（サ下二通）あしひきの

山の瀧つせおとまさるふり（ラ四通）よみ人しらず

序詞をおける格

古今春上　あづさ弓おしてはる雨けふふれり（ラ四上）あすさへふらば若菜つみてむ（マ四通）よ

み人しらず　同戀四　みちのくのあさかのぬまの花かつみかつ見る人に戀ひ

やわたらむ（ラ四寄）同　後撰戀一　このめはる春の山田をうちかへし思ひやみにし

人ぞこひしき（クシ通）よみ人しらず　同　いせの海にはへてもあまるたくふはのなか

き心は我ぞまされる（ラ四通）同　拾遺戀一　あま雲のやへぐもがくれふる神の音に

のみやは聞きわたるべき（カ四通）ひとまろ　同　大井川くだすいかだのみふれざを

みなれぬ人もこひしかりけり（ラ四通）よみ人しらず

以上の、二種の分ちは、先、五言のものを、枕詞また冠辭詞とす。こは、人の冠裝飾の如く、言語の首めに置きて、一首の潤飾と志たるものにて、歌の意には、係らざるものと志るべし。そハ、あづさ弓といふハ、春といハむ料の發言、あし引きといふハ、山といはむ料の發言、このめはる春の山田をといふは、うちかへしといハむ料の發言、あまぐものやへ雲がくれふるかみのといふハ、音といハむ料の發言ぞり。其の餘ハ推して知るべし。斯て、この事を知らむとするには、冠辭考加茂眞淵翁の著述なりをよく讀みて、枕言はいかふる用をふし、いかふる所に用うといふことを知るにあらざれば、得べからざるぞり。序詞は、枕詞を長くいへるものぞれば、枕詞の例に准へて知るべし。初學の徒、もし、辨別めする事能ハざらむには、識者に問ふべし

以上、短歌百首餘りあり。これを本書を離れて、語格の符箋を刺して、誤らざるまでに至れらむには、先、其の大方をば、學び得たるものといふべし

長歌語格を學ばむハ、先、對語と疊語との差別を辨ふべし。對語とは、其の語の樣、物の左右に並びたる如く、詞辭の正しく對向へるをいふ。疊語とハ、物を上下に疊み上げたる如く、詞辭のとゝのひたるをいふ。こは、五言七言つゞけるを一段として、二段連ける語の、同じ調べなるときに、これを味ひ試むるに、其の二段の語尾の詞、共に連用言とか、或は、共に截斷言とか、物の並べる如く、正しく對へるを對語とし、其の語尾の詞、一つは連用言、一つは連體言、或は截斷言にて對ひ合ざるハ、上下に疊めるものなれば、これを疊語とすと意得べし。是等の事ハ、國文學柱に詳にせれど、ふは、こゝに少いふべし

萬五

すめがみのいつくしきくに（下二 クシ迹 水通）
ことだまのさきはふくに（下二 ハ四迹 水通）

と

かたりつぎいひつがひけり

同十九　ちゝのみのちゝのみこと　はゝそばのはゝのみこと　おほろかにこゝろつくして

同一　かみつせにうかはをたゝて　ちもつせにさでさしわたし　やまかはもよりてつかふる

同二十　ちはやぶるかみをこゝとむけ　まつろへぬひとをばやはし　はきゝよめつかへまつりて

同一　おほみやゝこゝときけども　おほどのはこゝといへども　はるくさの志げくおひたる

同二　はるばふのたふとからむと　もちづきのたゝはしけむと　あめの志た云々おほぶねのおもひたのみて

此の如く、詞辭正しく相對へるがうへに、體言にもあれ。用言にもあれ。辭にもあれ。右二段の語尾より、共に、次の詞へ續く如く成へるハ、即、左右に對へるものふれば對語とす。又左右共に相對ひて截斷言ふるも同ト格ふり。

さて又　萬一　はるべはふかざしもち　あきたてばもみちかざせり　同

ふかざりしさりもき　ふきぬさかざりしはふもさけれど　やまを志みいりてもなら

ず　同二　かけまくもゆゝしきかも　いはまくもあやにかしこき　あすかの云々あ

まつみかゞ

此の如く、二段の語尾、一段ハ連用言、一段ハ截斷言、或ハ、上の段ハ截斷言、下の段は連用言、または、連體言、或ハ、上の段ハ連用言、下の段は連體言などにて、全く相對ハず。また、截斷れずして、次の詞へつゞくも、下の段の語尾より續くのみにて、對語の如く、二段の語尾より、共に續くことなし。これ、左右に並ぶものにあらずして、上下に疊めるが故なり。これを、疊語とす。凡、長歌ハ、これらの格あるを異ふりとす。此の餘ハ、短歌語格に同じ

萬一　やまとにはむらやまあれどとりよろふあめのかぐやまのぼりたちくにみをすればくにはらハけぶりたちこめうふはらハかまめたちたつうましくにそあきつしまやまとのくには　舒明天皇御製

同　みよしぬのみゝがのみねにときふくぞやきハふりけるひまふくぞあめハふりけるそのやきのときふきがごとそのあめのひまふきがごとくもふくもひつゝぞくるそのやまみちを　天武天皇御製

同　やすみしゝわがおほきみのきこしをすあめの志たにくにハしもさはにあれどもやまかハのきよきかふちとみこゝろをよしぬのくにのはふちらふあきつのゝべにみやばしらふとしきませばもゝしきのおほみやびとハふねなめてあさかはわたりふふきほひやふかハわたるこのかはのたゆることなくこのやまのいやたかゝらし

いはゞしるたぎのみやこはみれどあかぬかも」柿本朝臣人麻呂

同三　みよしぬのよしのゝみやはやまからしたふとかるらしかはからしさやけかるらしあめつちとながくひさしくよろづよにかはらずあらむいでましのみや」中納言大伴卿

同六　やすみしゝわごおほぎみのとこみやとつかへまつれるさひかぬゆそがひにみゆるおきつしまきよきなぎさにかぜふけばしらなみさわぎしほひればたまもかりつゝかみよゝりしかぞたふときたまつしまやま」山部宿禰赤人

同　やすみしゝわごおほぎみのたかしらすよしのゝみやはたゝなづくあをかきこもりかはなみのきよきかふちぞはるべははなさきをゝりあきさればきりたちわたるそのやまのいやますますにこのかはのたゆることなくもゝしきのおほみやびとはつねにかよはむ」同

同十三　あしはらのみづほのくにはかむながらことあげせぬくにしかれどもことあげぞわがすることさきくまさきくませとつゝみなくさきくいまさばありそなみありてもみむともゝへなみちへなみしくにことあげすあは」柿本朝臣人麻呂

麻呂

長歌は、大かた、此の格ふり。この、歌よまむには、猶委しく二十首餘りも學ぶべきふり。

文章の語格を學ばむハ、上の條〻の習法に異ふる事ふければ、容易く學び得られぬべし。其が中に、左方に畢ぐるハ、中ッ世の文ふれば、音語、音便語など交りたれば、其を辨別せずてハ學び難し。今其の概略をいはむに

官名、物名ふぐ、字音にかけるが多かる中に、普通とハいさゝか其の樣かハれり。

裝束 消息 紙 承 御 圃 身 岡 連

せうぞく、せうそこ、しぞう、みずいじん、ごたちの類ふり

言語を字音にいへるあり。 水 煮 釜 切 實 棟 口 舌 眞 實

ほい、やうナキ、せちニ、じちやう、くぜち、ふんじち、

氣 色 何 條

けしき、ふでうの類

音便語ハ、 いたう、からう、ふろう、たかう、ちかう、ふかう、うつくしう、おふとう、かふしう、こひしうふぐ、久志幾と活く詞の、連用のくをうといへる類ひ、限りふく多し

又、かいまみ、ふまめいたる、かいつらね、さいはひなど、きをいといへるも少からず

又、つかうまつる、まうづる、たまふてふぐいへる多し

此の他なほあり。推して知るべし

右の如きは左に畢ぐる文中には、字の傍に、片假名して、本語を加ふべけれは、先ハ、其につきて學ぶべし。すべて、物語日記の類ひハ、此等の事を意得て學ぶべきふり。かくて、歌も、文も、心に思ふことをいひ出で、かき出づるものにはあれども、歌は調べをきゝとする故に、五言七言、上の句、下の句ふぐいひて、詞短きを、文は、心に思ふ限り、事のある限りを、長くも短くも、かきつゞけ行くを其の間に、自然

の定りありて、句を成し、章を成し、篇を成すふり。是らのことハ、既に、國ッ文學柱に、詳に論へれば、就きて見るべし、語の學びハ、文作（フミカ）く爲の學びふれば、語の截（キ）るゝ所と、連（ツヅ）く所とに、心を用ゐて學ぶべし、きるゝとつゞくとハ、即、句を成すものにて、文章に句といふハ、即、截斷言ふればふり。さて、此の句を作るが、文作（カ）く始めにて、これを得れば、長くも短くも、書きつゞくることを得、章を成し、篇を成すことも得らるべければ、其の意して、此の條をばねもごろに學ぶべきふりかし

伊勢物語九段　むかし男ありけり。其の男、身をやうなきものに思ひなし、

てみやこにはをらじ、あづまのかたにすむべき國もとめにとて行きけり。もと

より友とする人ひとりふたりしていきけり。道知れる人もなくてまどひ、

いきけり。三かはの國八はしといふ所にいたりぬ。そこを八橋といひけるハ水

行く川のくもでなれば橋八つわたせるによりてなむ八橋といひける。その

さはのほとりの木のかげにおりゐて、かれいひくひけり。其の澤にかきつばたいと

おもしろくさきたり。それを見てある人のいハく、かきつばたといふ五もじを

句のかみにすゑてたびの心をよめ。さいひければよめる

から衣きつゝなれにしつましあればはるゝきぬるたびをしぞ思ふ。さよめ

りければみな人かれいひのうへに涙おとしてほとびにけり。行きふしてするがの

國にいたりぬ うつの山にいたりてわがいらむ こする道はいとくらうほそきにつ
なかづらはちげりてもの心ぼそくすずろふるめを見る事とおもふにすぎやうざ
あひたり かゝる道にいかでか いまする こいふを見れば見し人ふりけり
京に其の人の御もとにとてふみかきてつく
するがふるうつの山べのうつゝにもゆめにも人にあはぬふりけり ふじの山
なみだはさつきのつごもりに雪いとしろうふれり
時しらぬ山はふじのね いつとてかのこまだらに雪のふるらむ 其の山はこ

にたとへばひえの山をはたちばかりかさねあげたらむほどしてふりはしほぞり
のやうになむありける ふほ行きゝてむさしの國とこしもつふさの國とこの中にい
とおほきふる川あり それをすみだ川といふ その川のほとりにむれゐて思ひ
それをかぎりとくもきにけるかふとわびあへるにわたしもりはやふねこ
のれ 日もくれぬといふにのりてわたらむとするにみふ人物わびしくて
京に思ふ人ふきにしもあらずさるをりしも白鳥のはしとあしとあかき
しきの大きさなる水のうへにあそびつゝくふ京には見えぬ鳥ふればみ

ふ人見知らず／わたしもりにことひければ是ふむ都鳥／といふをきゝて

名にしおはゞいざこと〻ふむ／都鳥わが思ふ人はありやなしや／と／とよめりけれはふねこぞりてなきにけり／

竹取物語　いまはむかし／たけとりの翁といふものありけり／野山にまじりて竹をとりつゝよろづのことに／つかひけり／名をばさるきのみやつこと／ふむいひける／その竹の中にもとひかる竹ふむ一すぢありける／あやしがりてよりて見るに／つの中ひかりたり／それを見れば三寸許ふる人いとうつくしうてゐたり／

おきふ云ふやう／われ朝ごとゝ夕ごとに見る竹の中におはするにて知りぬ／子にふり給ふべき人ふめり／ことて手にうち入れて家にもちて来ぬ／めのおうふにあづけてやしなはす／うつくしきことかぎりふし／いとをさなければ籠に入れてやしなふ／たけとりの翁竹をとることに／此の子をみつけてのちに竹をとるに／ふしをへだてゝよごとにこがねある竹を見つくる事かさなりぬ／翁やうゝもたちまちにふりもく／此のちことやしなふほどにすぐゝことおほきにふりまさる／三月はかりにふるほどにやきほどふる人になりぬれば髪あげふゝさだしてかみあげ

せさせきちやうのうちよりも出さず
いつきかぢづきやしふふほどに此のちごのか
たちけうらなる事世にふくやのうちくらきところふくひかりみちたり翁こゝ
ちあしくゝるしき時も此の子を見ればくるしき事もやみぬはらだゝしき事も
ふぐさみけり翁竹をとることびさしくふりさかえにけり此の子いとおほき
にふりぬれば名をばみむろといむべのあきたをよびてつけさす あきたふよ竹のかく
やびめとつけつ

土佐日記

をとこもすなる日記といふものを女も為てみむとてするなり

それのとしの十二月の二十日あまり一日の日のいぬの時にかどです そのよ
しいさゝかものにかきつく ある人あがたの四とせ五とせはてゝれいのごと
どもみな為をへて解由などりてすむたちよりいでゝ舟にのるべき所へわた
るかれこれ為るあらぬむくりす年ごろよくゝしつる人々なむわかれがた
く思ひて其の日為きりにとかくしつゝのゝ為るうちに夜ふけぬ

二十二日 和泉の國までたひらかにとねりはひたつ藤原言實 船路なれど馬
のはふむけす かみなかしもあひすきていとあやしく為ほうみのほとりにて

あざれあへり

二十三日八木の康教といふ人あり この人國にかふらずしもいひつかふる

ものにもあらず これぞたゞきやうにて馬のはふむけしたる守がらにや

あらむ 國人の心のつねとして今はとて見えざなるを心あるものはばちず

にふむきける これはものによりてほむるにしもあらず

二十四日講師うまのはふむけしにいでませり ありさこあるかみふかしもわら

はまであひしれて一文字をだにしらぬものしかあしは十文字にふみてぞ

あそぶ

二十五日守のたちよりよびにふみもてきたれり よばれていたりて日ひと日

夜ひと夜とかくあそぶやうにて明けにけり

二十六日ふほ守の錦にてあるじの忘りてをのこあまたにものかづけたり

からうたこゑあげていひけり やまと歌あるじもまらうどもこと人もいひあへり

けりからうたこれにはかはずやまとうたあるじの守のよめりける

都いでゝ君にあはむとこしものをこしかひもなくわかれぬるかな

ふむ（ラ四一連ケミコシカアリ）ありければ（ラ四一迄）かへる（開）前の守のよめる

志ろたへの浪路をさほくやきかひて（クシ連）われにこそ（ハ四連）いたれふらふこに（開）トナムヨミ

ケル（人）ことと人々のもありけれ（ラ四一連）ごさかしきも（クシ迄）なかるべし（ラ四一迄）ごかくいひて（ハ四連）前の守

も今の（開）もろともにおりて（ラ上三連）今のあるじも前（開）のアルジも手（開）ごりかはして（サ四連）あひ

ごとに心よげふることし（クシ本）て（ラ四一連）いでにけり（タ下一連）

古今集序　上略

ちかき世にその（ア）名きこえたる人はすふち（開）僧正遍昭は歌の

さまはえたれどもまことすくなし（ア下一連）たとへば（ハ下二等）ゑにかけるをうなを見て（ラ四一迄）いたづらに心

をうごかす（サ四迄）がごとし（開）ありはらのなりひらは（ア）そのこころあまりてことばたらず（ラ四等）志ぼめ

る花の（開）色なくてにほひのこれる（ラ四一迄）がごとし（ハ四連）ふんやのやすひでは（ア）ことばはたくみ

にてそのさま身（ア）におよばず（ハ四等）いはゞあきんど（ハ人）のよきゝぬきたらむがごとし（ク連）宇（開）治山

の僧（開）喜撰はことばかすかにして（ア）てはじめをはりたしかならず（ハ四等）いはゞ秋の月（開）を

見るにあかつきの雲（開）にあへる（ラ四一迄）がごとし（ラ四一迄）よめるうたおほく聞えねば（ア）かれこれを

かよはして（サ四連）よく志らず（ハ四等）なのごとまちはいにしへのそこほりひめの流ふり（ア）あはれなる

ようにてつよからず（ラ四一等）いはゞよき女のふやめるごころあるにゝたり（ナ上一連）つよからぬ（ラ四一等）

はをうふのうたふれば‖なるべし‖大とものくろぬしは此の聞語そのさまいやし‖
いはばたき木おへる山人の花のかげにやすめるが如し‖このほかの人々其の
名きこゆる野べにおふるかづらのはひゝろごり‖はやしに志げきこの葉のごとく
くにおほかれど歌とのみおもひてそのさま志らぬふるべし‖
俗文の語格を學ばむには、音便語、言便語ハ更ふり。訛語さへ多ければ、其を辨
別して、本ッ語に復さゞれば、語格分明り難し。此の事、上條に、粗、辨へたれど、な
ほこゝにもいふべし
‖きをうといへる音便語多し　きいテ、志りぞいテ、たゝいテ、たなびいテ、ないテ、太
刀ヲはいタリ、ひらいテ、ひいテ、

‖くをうといへる音便語殊に多し　あらふ志う、おこがましう、おびたゞしう、と
う、ううゝ、べうモアラズの類ふり。
‖ちをつといへるも少からず　あやまつテ、うがつテ、うつテ、かつテたつテ、まつ
テ、もつテの類なり。
‖ひをふといへるも、また、少からず　あざわらふテ、志たがふテ、たゝかぶテ、ふるふ
テ、ふるまふテの類ふり。
‖きをひといへる言便あり　かひテ、さわひデ、太刀ヲはひテ、やすひコ、ロの
類ふり。これハ、きといふ音便語を、書き誤れるにや。
‖志をひといへるもあり、　あそばひテ、矢ヲさひダリ、ふがひテはづひテ、まはひ
テ、の類なり。
‖ひをつといへるもあり　いつテ、きらつテ、たゝかつテ、ちかつテ、ふるつテ、むかつ

テ、の類なり。

りをつといへるは、いと多し　あつテ、あがつテ、あゐごつテ。かへつテ、さつテ、志つテ、さゞつテ、たまはつテ、つくつテ、のつテ、まはつテの類ふり

にをんといへるあり　いかん、さんざふらふ、ふんゞ、なんか、ふんでうの類ふり。

びをんといへるもふり　うかんデ、志のんデ、とんデ、まふんデ、よろこんデ、たふとんデの類ふり。

みをんといへるあり　あはれんデ、おもんズ、かろんズ、かふしんデ、このんデ、たのしんデ、たのんデ、つかんデ、とんデ、ふくんデの類ふり、

とすらんをずらんといへる詞言ありこれ、未詳ならず、なほ考ふべし　あらんずらん、せんずらん

とするをずるといへるあり　さふらハんずるつかまつらんずる、まゐらんずるの類なり。

んのあまれるものあり　せずんば、なくんば、にくみんズ、よみんズ、ときんば、志て

んゲレの類なり。

つのあまれるものあり　あつばれ。あつたら、志つかト、まつたく、もつばら

ようピイテ、ひいふつト、ひやうトハナツふご、本語の知られざるあり。こハ、弓

引き、矢放つ、ありさま詞と見べし

右の中に音便語ハ、上の條にもありて、それ〳〵法あるものにはあれども、古くは無きものふれば、好みて用うべきにあらず。ましして言便、また、詞言に至りては、いとも〳〵聞き苦しきものふれば、たゞひ俗文たりとも用うべきに非ず。斯て此等の語ハ、左の本文中、字の傍に、片假字にて、其の本語を、注(カキイ)れて見わけ易く學び易からしめむとす

平家物語四　ちよくせんふれば（月巳）（「サ四東」）（「サ上二通」）めしにこれうじて（六通）（六通）（六通）さんだいす（「サ四片」）（「ナ四通」）（「ラ四通」）よりまさたのみきり（「开」）

たるらうどうとほとふみの國の住人いのはやたにほろのかさきりはいたりける矢
をおはせてたい一人そ具したりける我が身はふたへのかりぎぬに山鳥の尾を
もつてはいたりけるとがり矢二すぢ志げごうの弓に取りそへて南殿の大床に志こ
うす〻よりまさや二つ手ばさみける事ハ雅頼卿その時いまださ少弟にておハ
しけるがへんげのものつかまつらんずる〻ハよりまさぞ候ふらん〻さえらび申さ
れたる間一の矢にてへんげの物いそんずるほどならば二の矢にハ雅頼
のべんの志やくびのほねをいん〻となり〻あんのごとく日ごろ人の申すに〻たがハ

ず〻御のうのごくげむにおよんで東三條の森のかたより黒雲一むら立来り
て御殿の上に〻たなびいたり〻よりまさきつと見あげたればくもの中に〻あやしき
物のすがたあり〻いそんずる程ふらば世に〻有るべし〻ともおぼえず〻去りながら矢
とつてつがひ南無八幡大ぼさつと心の中にきねんじてよつぴいてひやうと〻はふ
つ〻手ごたへしてはたとあたる〻えたりやおうと矢さけびをこそ志てんげれ〻いの
はやたつとよりおつる處をとつておさへつかもこぶしもとほれ〻〻〻とつぐけさま
にこの刀そさいたりける〻その時上下てん手に火をともして是を御らんと

見給ふにかしらはさる　むくろはたぬき　尾はくちふは　手あしはさら

のごとくにてなくこゑぬえにぞにたりける　おそろしなどもおろかなり　主

上御かんのあまりに獅子王と申す御けんをくださる　うちの左大臣殿是を

給りついてよりまさにたばんとて御前のきざはしをなからはかりおりさせ給ふ

折りふしころは卯月十日あまりの事なれば雲ねに郭公二聲三こゑおとづれ

てこほりければ左大臣殿

ほとゝぎす名をもくもゐにあぐるかな

とおほせられかけたりければよりまさ右のひざをつきひだりの袖をひろげて月

をすこしそばめにかけつゝ

やみハり月のいるにまかせて

とつかまつり御けんを給りてまかり出づ　このよりまさの卿ハ武げいにもかぎら

ず　歌道にもまたすぐれたり　とて時の人々かんじあハれける

太平記七　主上ハ虎口ノ難ヲ御遁レ有ツテ御船ハ伯耆ノ國名和ノ

湊ニ著キニケリ　六條少將忠顕朝臣一人先船ヨリオリ給ヒテ此

ノ邊ニハ何ナル者カ弓矢取ツテ人ニ知ラレタル＝ト問ハレケレ
バ道行ク人立チヤスラヒテ此ノ邊ニハ名和ノ又太郎長年ト申ス
者コソ其ノ身指シテ名有ル武士ニテハ候ハネドモ家富ミ一族
モ廣フノ心ガサアル者ニテ候ヘ＝トゾ語リケル＝忠顔朝臣能ク、
其ノ子細ヲ尋ネ聞イテ驅テ勅使ヲ立テ、仰セラレケルハ、主上隱
岐判官ガ舘ヲ御迹ゲ有ツテ今此ノ湊ニ御坐アリ＝長年ガ武勇兼ネ
テ上聞ニ達セシ間御憑ミアルベキ由ヲ仰セ出サルヽナリ＝憑マレ、

進ラセ候フベシヤ＝否ヤ＝速ニ勅答申スベシ＝トゾ仰セラレタリケル＝
名和ノ又太郎ハ折節一族共呼集メテ酒飲フテ居タリケルガ此ノ由
ヲ聞イテ案ジ煩フタル氣色ニテ兎モ角モ申得ザリケルヲ舎弟小
太郎左衛門尉長重進ミ出デヽ申シケルハ古ヨリ今ニ至ル迄人ノ
望ム所ハ名ト利トノ二ツナリ＝我等忝クモ十善ノ君ニ憑マ
レ進ラセテ軍門ニ曝ス＝共名ヲ後代ニ殘サン事生前ノ思出
デ死後ノ名譽タルベシ＝唯一筋ニ思定メサセ給フヨリ外ノ儀有ル

ベシ＝ト モ 存ジ候ハズ＝ト申シケレバ 又太郎ヲ始メトシテ 當座ニ
候ヒケル 一族共二十餘人 皆此ノ儀ニ同ジテケリ＝サラバ 頓テ合
戰ノ用意候フベシ＝定メテ追手モ跡ヨリ懸リ候フラン＝長重ハ主上
ノ御迎ヘニ參ツテ直ニ船上山ヘ入リ進ラセン＝旁ハ頓テ打立ツテ
船上ヘ＝御參リ候フベシ＝ト云ヒ捨テ、鎧一縮シテ走リ出デケ
レバ 一族五人腹巻取ツテ投懸ケ〳〵皆高紐シメテ共ニ御迎ヘニ
ツ＝參ジケル＝儀ノ事ニテ御輿ナ[ン]ドモ無カリケレバ長重著タル鎧

ノ上ニ荒薦ヲ巻イテ主上ヲ負進ラセ 鳥ノ飛ブガ如クシテ船上ヘ
入リ奉ル＝長年近邊ノ在家ニ人ヲ廻シ思立ツ事有ツテ船上ニ兵粮
ヲ＝上グル事アリ＝我ガ倉ノ内ニアル所ノ米穀ヲ一荷持チ運ビタラ
ン者ニハ錢ヲ五百ツヽ取ラスベシ＝ト觸レタリケル間ニ十方ヨ
リ人夫五六千人出來テ我劣ラジ＝ト持送ル＝一日ガ中ニ兵粮
五千餘石運ビケリ＝其ノ後家中ノ財寶悉人民百姓ニ與ヘテ己ガ館
ニ火ヲカケ其ノ勢百五十騎ニテ舟上ニ馳參リ皇居ヲ警固仕ル＝長

年ガ一族名和七郎ト云ヒケル者武勇ノ謀有リケレバ白布五百端有リケルヲ旗ニコシラヘ松ノ葉ヲ焼キテ煙ニフスベ近國ノ武士共ノ家々ノ文ヲ書キテ此ノ木ノ本ノ彼ノ峰ニ立置キケル此ノ旗共峰ノ嵐ニ吹カレテ陳々ニ翻リケル様山中ニ大勢充満シタリト見エテオビタヽシ

漢文よみの語格を習ふにも、音便等の意得上の條の如し。漢文よみの古き訓點の存れるハ、道春點なり。是故に、今も、道春點の訓を、其のまゝ取りて本文として、學は志めむとす。其が中に、字の中間の、○小圈を施せるものあるハ、本書の讀點ふり。又、字の右傍に、小圈を施せるは、句點なり。こは、語格の截斷言と、異同あるを知らしめむとて、志るせるなり

論語學而子曰ハク。學ビテ時ニ之ヲ習ハス。亦説シカラ不乎原本、不斤定通習之。

ロロコバシカラム

と讀點あり。之に從りて訓せば、之ヲ習ハスハとか、之ヲ習フハとか訓まゝほし。然らざれば讀にならず

朋遠方自リ來ル亦樂シカラ不乎こゝも、來ルヿ有ルもと、訓まゝほし

不斤定通

人知ラ不レドモ而ルヲ慍ラ不。亦君子ナラ不乎こゝも、慍ラ不ルハと、訓まゝほし。然らざれば何レも、讀と成り難し。猶考ふべし

不斤定通

君子ナラン

有子曰ハク。其人ト爲リ也孝弟ニメ而上ヲ犯サンヿト好ム者ハ鮮シ矣。上ヲ犯サンヿト好マ不メ而亂ヲ作サンヿト好ム者ハ未之

有ラジ也（これも、犯サンフチ、作不ト訓まゝはし）君子ハ本ヲ務ム。本立チテ而道生ル。

孝弟ハ也者其仁ヲ爲フ之本與（まの爲之を、オコナフノと。ノを訓みつけたる本い、再刻の誤りなるべし。それ、用言に訓める下を、ノと受くる例なければなり）

子曰ハク。巧言令色スルハ鮮キカナ矣仁（こは鮮矣と、直ちに、截斷るゝ方によめるぞよけむ）

曾子曰ハク。吾日ニ三ツナガラ吾ガ身ヲ省ル。人ノ爲ニ謀リテ而忠ナラ不乎。朋友與交リテ而信ナラ不乎。傳ヘテ習ハ不乎（こゝは、忠ナラザルカ、信ナラザルカ、習ハザルカと、疑の截斷のカを、訓みつけまはし）

子曰ハク。千乘ノ之國ヲ道ムルニ。事ヲ敬シテ而信アリ。用ヲ節シテ而人ヲ愛ス。民ヲ使フニ時ヲ以テスと、截斷言によまはし

子曰ハク。弟子入リテハ則孝アリ。出テハ則弟アリ。謹ミテ而信アリ。汎ク衆ヲ愛シテ而仁ニ親ク。行餘力有ルトキハ則以テ文ヲ學ブ。（こゝは、信アリ、人ヲ愛シと、連用言に訓み、末に至りて、こゝい、孝ナレ、弟ナレ、信アレ、親ケ、學べと、使令言によまゝはし）

右の如く、こゝの言のとゝのひにかゝはらずして、訓點を加へたるものなり。この故に、語の學びを爲ざれば、正しく讀むこと能はずといふなり。但、こゝの小註は、試みにいへ

るのみふれば、拘るべからず

凡、語學ハ、上の短歌の條より、此の條に至るまでを、此の書の法の隨に、れもごろに習ハひ學びたらむには、何の歌、何の文ふりとも、其の格を試むる事を得べし。然學得たらむにハ、中古のも、近世のも、雅文も、俗文も、語格は更ふり。係辭、結辭、のごゝのひも、一條の繩を引延へたる如く、少も違ふ事無く、貫通れる事をも覺得られぬべし。然覺得たらましかば、人にも教へ、幼童をも導き得られなまし。是此の道の獨學びの法にして、予が此の書を書著せる所由ふりかし

此の書、如此結めてハあれど、猶あかざれば、ここに作文の意得を、少辨ふべし。上にも言へる如く、語學びハ、素より文作く爲なれど、文には、文の法格ありて、其を辨へざれば成し難し。そハ先、語格に結辭といふハ、くさゞの係にて、截斷言にて結ぶハ言ふも更ふり。そやかの係りにて、連體言にて結び、こその係りにて、已然

言にて結べるも、皆、上の係辭に引かれて、轉りて截斷言とふれるふれば、結辭ハ、すべて、截斷言ふる事を辨ふべし。此の截斷言、すなはち、文章に所謂句ふり。句ハ、漢家の稱へにて、皇國の古にハ切といへり。彼のヲコト點に、□○切點とあるハ是ふり。こゝをもて、句と截斷言と同義ふる事をも知るべきふり。斯て、此の句を作るが、作文く始めにて、此の句を作る法を得れば、其を積みて、章を成し、篇を成すことも得らるべきふり。此の句法は、上に擧ぐる歌文章の格を、れもごろに味ひ試みてば、覺らるべきなり。抑、此を書に擧ぐる文ども、其の法格ハ、同一けれど、雅文と俗文との分ちあり、古文と、近文との別ちありて、自然、其の體裁を異にす。雅文ハ、短句多く、俗文ハ長句多し。其が中に、太平記ノ文の、殊に長句多きは、其の文の下れるふるべし。之に依りて按ふに、雅文ハ更ふり。俗文ふりとも、句の短きを常とし、妄に長く續くる事ふかるべし。若、短く書き得られざる

時ハ、長く書くべき格ありて、國ッ文學柱に辨へたれば、其に從りて書くべし。さて、大く下れる俗文にはあれども、其の法格ハ失ハざるものにて、當今の世の普通文に比ぶれば、又、大く上れるものふれば、上に引ける太平の記文を復舉げて、其の文格を辨ふべし

主上ハ、虎口ノ難ヲ御遁レ有ッテ、御船ハ、伯耆ノ國、名和ノ湊ニ著キニケリ』くさ〻〻の辭の二を係りとして、戴斷言にて結べり。但、コケリのコは、去の類ひのコにて、係辭にあらざる事、既に言へるが如し。此の文ハ、隱岐國を發御ありてより、こゝに著御ならせらるゝ迄の文を結べるなり。六條少將忠顯朝臣、一人、先船ヨリオリ給ヒテ、こは、船上臨幸の發端の文なり。又、この給ヒテは、詞を隔て、下の問ハ、レケレバへつゞく、以下ハ、忠顯朝臣の道行く人に問ひたまふ詞なり「此の邊ニハ、何ナル者カ、弓矢取ッテ人ニ知ラレタル』これカと係りて連體言のタルにて結べるなり。これ詞の結びにて、上の文にはあト、問ハレケレバ、結ばりて戴斷れたるとト受けて續けたるなり道行ク人立チヤスラヒテ、このヤスラヒテは詞とへだてゝ、下の語りケルへつゞく、以上ハ文なり。以下ハ道行く人の答への詞なり。「此ノ邊ニハ、上の問の詞を受けてい

ふ。名和ノ又太郎長年ト申ス者』コソ其身指シテ、名アル武士ニハ候ハネドモ、家富ミ、一族モ廣フシ、心ガサアル者ニテ候ヘ』こは、コソと係りて、已然言の候へにて結べり。トゾ語リケル』これも上の詞の法の如く、結ばりて、戴斷れたるを、トと受けてつゞけ、いふよりこゝに至る文の句にて、其の問答への詞を挾み、其の詞の、係り結びありて句を成せるを、こゝは、その文、總べての結びなり、これハ、詞によりて延ハりたる長句の格なり。忠顯朝臣能ク〻其ノ子細ヲ尋ネ聞イテ、驅テ、勅使ヲ立テ、仰セラレケルハ、以上ハ文なり。「主上隱岐ノ判官ガ舘ヲ御迯ゲ有ッテ今此ノ湊ニ御坐アリ』こハ、くさ〻〻の辭の中のコと係りて戴斷言のアリにて結べり。以下ハ詞なり。こは、詞の結びにて、上の文にはあづからずと知るべし。長年ガ武勇、兼ネテ、上聞ニ達セシ間、この間の語、最も俗言、用うべからず御憑ミアルベキ由ヲ、仰セ出サル、ナリ』上に同じ格に結べり。憑マレ進ラセ候フベシヤ』これは、おのづからの格にて結べり否ヤ』上に同じ速ニ勅答申スベシ』これは、くさ〻〻の辭を係りとして結べり。トゾ仰セラレタリケル』これも上の詞のベシと戴斷れたるを、トと受けてつゞけたること上の例に同じ。又、上に「仰セラレケルハ」と言ひて、復、こゝに「仰セラレケル」といへるハ、古文の格なり。これも、忠顯

朝臣といふよりこゝに至る、一つゞきの句なる中に、勅使の詞の挾まれるにて、其の詞い、其の詞の係結ありてとゝのひ、文は文にて、それをとりすべて、ツとかゝりて、連體言のケルにて結べり。これも詞によりて延いりたる長句の格にて、一つの長句の中に、四つの短句を挾めり。名和又太郎ハ、折節、一族共呼集メテ酒飲フテ居タリケルガ、此ノ由ヲ聞イテ、案ジ煩フタル氣色ニテ、免モ角モ申得ザリケルヲ、舍弟、小太郎左衛門尉長重進ミ出デ、申シケルハ、この文、ザリケルヲを、ザリケリと、切らまはし「古ヨリ今ニ至ル迄、人ノ望ム所ハ、名ト利トノ二ツナリ』これは、くさゝの辭の係りにて、結び言のナリにて結べり。これも詞の結びにて、上の文にいあづからず。我等、忝クモ、十善ノ君ニ憑マレ進ラセテ、戸ヲ軍門ニ曝ス共、名ヲ後代ニ殘サン事、生前ノ思出デ、死後ノ名譽タルベシ』生前云々、死後云々い、對語なり。さてこゝは、おのづからの格にて切れたり。唯、一條ニ思ヒ定メサセ給フヨリ外ノ儀有ルベシ』トモ、こゝも、ベシにて、切れむとする を、トモと受けてつゞけたり。存ジ候ハズ』存ジ候は、甚の俗言なり。これも、くさゝの係にて切れむとするを、トとうけてつゞけたり。こゝも上に申シケレバと言ひて復申シケレバといふにて截斷せり。

は古文の格なり。又太郎ヲ始メトシテ、當座ニ候ヒケル一族共二十餘人、皆、此ノ儀ニ同ジケリ』これも、名和又太郎云々より、こゝに至る間に長重ガ詞をさし挾めり。これも、詞によりて延いりたる長句の格にて、三つの短句とはさめり。此より以下い、「サラバ、頓テ、合戰ノ用意候フベシ』こゝは、おのづからまた、長重が詞なり。」り。定メテ追手モ跡ヨリ懸リ候フラン』くさゝの辭の係りにて結べり。重長ハ、主上ノ御迎ヘニ參シテ、直ニ船上山ヘ入進ラセン』旁ハ、頓テ打立ツテ船上ヘ御參リ候フベシ』以上、長重が詞なり。こゝに至る間にて結べり。ト云ヒ捨テ、詞はベシにて切れたるも、上の同格にて結べり。を例のトとうけて文へつゞけたり。鎧一縮シテ走リ出デケレバ、こゝは、出デケリと切らまはしき所なり。一族五人、腹巻取ツテ投懸ケ〳〵、皆、高紐シメテ、共ニ御迎ヘニゾ參ジケル』こゝい、ゾとかゝりて例の連體言のケルにて結べり。これ又、サラバ云々よりこゝに至る文を結べるにて、上と同じき長句の格なり。これも、四つの短句を挾めり。俄ノ事ニテ、御輿ナ[ソ]ドモ無カリケレバ、長重、著タル鎧ノ上ニ荒蔦ヲ卷イテ主上ヲ負進ラセ、鳥ノ飛ブガ如ク、船上ヘ入奉ル』これ、常の格の短句なり。結びい、おのづから斷る

ゝなり。長年、近邊ノ在家ニ人ヲ廻シ、以上ハ文、以下ハ詞なり。「思立ツ事有ツテ船上ヘ兵粮ヲ上グル事アリ」この結びは、思立ツ以下の結びにて、それより以上には拘はらず。我ガ倉ノ内ニアル所ノ米穀ヲ、一荷持チ運ビタラン者ニハ、錢ヲ五百ツヽ取ラスベシ「上ト同ジ格ノ短句ナリ。」ト觸レタリケル間ニ、間ニは、大ク俗なる事、上に云へるが如し。てゝは、タリケリと結ばせはしき所なり。十方ヨリ、人夫五六千人出來テ、我劣ラジ「てゝも、ジにて切るゝなり。」ト持送クル「切れひと」トとうけ、其のトを係りとして、截斷言にて結べるなり。一日ガ中ニ、兵粮五千餘石運ビケリ「こは、いと短くして、古文の短句に等し。其ノ後、家中ノ財寶、悉、人民百姓ニ與ヘテ、己ガ館ニ火ヲカケ、其ノ勢、百五十騎ニテ、舟上ニ馳參リ、皇居ヲ警固仕ル「ては、普通ノ句造りにて、これも短句といふべし。古文ならば、云々ヲ百姓ニ與ヘテ己ガ館ニ火ヲカケテ、其ノ勢百五十騎ニテ、舟上ニ馳參りて、云々と、ての辭を重ぬる格にてつゞくべき所なり。」長年ガ一族、名和七郎ト云ヒケル者、武勇ノ謀武勇ノ謀、義聞え ず。脫字あるにや。有リケレバ白布五百端有リケルヲ、旗ニコシラヘ、松ノ葉ヲ燒キテ煙リニフスベ、近國ノ武士共ノ、家々ノ文ヲ書キテ、この文も古文ならば、旗ニコシラヘテ松ノ葉ヲ燒キテ、煙リニフスベテ、近國ノ武士共ノ、家々ノ文ヲ書キテと重ぬる格もて、つゞくべきなり。」此ノ木ノ本、彼ノ峰ニゾ立置キケル「ゾと係りて、連體言のケルにて結べり。これは、所ニ作の繁くて、延いたる長句の格なり。」此ノ旗共、峰ノ嵐ニ吹カレテ、陳々ニ翻リケル樣、山中ニ大勢充滿シタリ「てゝも、くさゞゝタヽシ」上の語ノ切るゝを、例のトにて受けてつゞけ、くさいゝの係りにて結べり。これ、一篇の結尾の文なり。ト見エテ、オヒ此は、いと降ちたる世の俗文にて、土に辨へる如く、種々の卑語訛言さへ入交りて、甚く俗びたり。然あれども、當時、ふは、自然の言語の定りの傳ハれりきと見えて、語の斷續、辭のとゝのひ、句の長短等、大かたは、古の格に合ひ、はた、係り結びなど、一つも誤らざる事此の如し。然れば、雅文は更ふり。俗文なりとも、此等の事をば、よく正しく調へまほしき事なり。初學の徒、こゝに心を留めて、誤らざるべき事にこそ。猶、文格の事は國ッ文學柱に委しくすれば、就きて見るべし

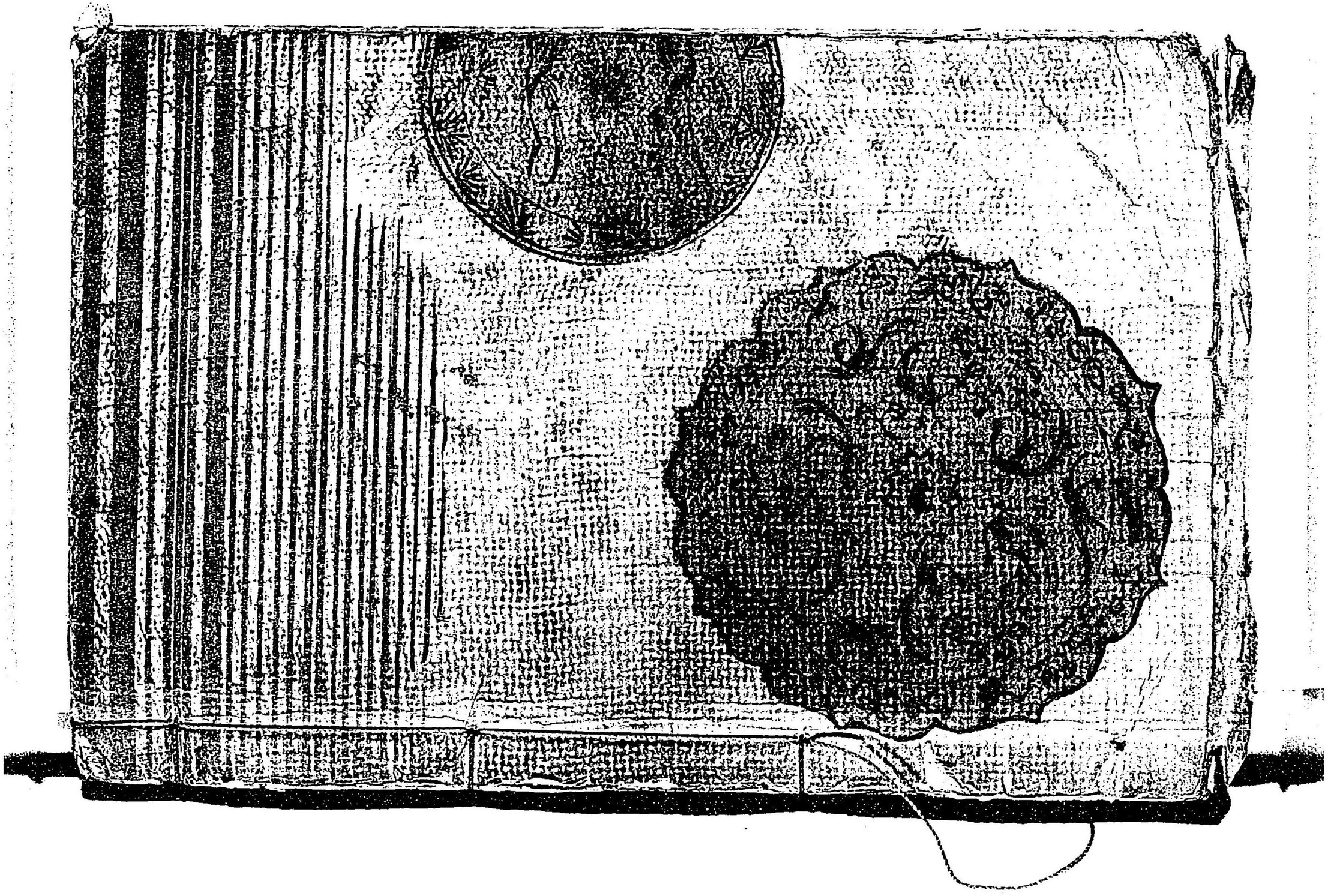
語學自在卷之二終

明治二十六年四月廿五日印刷
明治二十七年四月廿八日發行

定價金拾五錢

編集者　近藤寵城
東京市小石川區指ヶ谷町七番地

發行兼印刷者　近藤土造
東京市麹町區飯田町五丁目二十六番地

發行所　近藤活版所
東京市麹町區飯田町五丁目二十六番地

版權所有